

新たな響き

森野 水琴

彼の耳に新たな響きが届く。

失った水琴窟すいきんくつの調べを思い出させるかのように響く。

離島の森を走っていて耳にした調べだった。

野原に出て発信源の家を発見した。

コロナの影響で走りに行けなくなり、三年ぶりに訪れたが、水琴窟の調べは聞こえなかった。

土地の人の話では、コロナの間に水琴窟の持ち主は引越したらしい。

今では更地になっていて、水琴窟は土の中に埋もれているのだろう。

そんな喪失感を癒すように、彼の心に新たな響き。

これからは この調べとともに生きていこう

ゆつたりと心地よく響く

何ものかが調べを乱そうとしている。

たえなる調べへの嫉妬が成せる所業であろうか。

買えない喧嘩なので、魂が震えるままに したためるに限る。

こんな時は物書きであって良かったと彼は微笑む。

書けば書くほど心がなごむ。

なごんだ心に沁みる響き。

文字と音のハーモニーを楽しもう

私たちは のしりあうために生きているのではなく  
はげましあうために生きている

怒りが昇華していくようで 好きな言葉である  
悪貨が良貨を駆逐するとも 美しい言の葉を語り継ぎたい  
語り継ぐことによつて 新たな命が宿っていく

やまと言葉であれ やまと歌であれ 琴線に触れる調べとなるはず

彼は書道のレッスンで、祝詞のりとを習うようになった。

神主が神前で読み上げる祝詞には、独特の言い回しがある。

まず手本として配られたのは 祓詞はらいのこしほであった。

今では ひらがなで書かれる所も、万葉仮名で書かれているため、一面漢字ばかりである。

禍わざわいや穢けがれが祓はらわれてくれればとの一心で彼は書く。

家内安全の祝詞は例文を引用して、祓詞と祝詞のセットで、日に日に彼は唱えている。

こうして 新たな響き加わった

肌に触れたら 罪になるなら  
心に触れて 愛とせよ

そう彼が詠んだら、彼女から

今宵あなたと 逢えるのならば  
かわいた心 抱かれない

と返って来た。座った膝に彼女を乗せて背中越しに彼は包み込む。彼女の背中に彼の鼓動が新たな響きとして伝わる。

冷え込む夜に 出逢ったからは  
もえる心で あたためむ

かわいた心を潤しながら 夜が更けていく

彼は美酒を飲みながら、内から奏でられて来る新たな響きを楽しんでいる。

「ただよう」は ただ酔うなのか それとも 漂うのか  
問いかけながら彼は詠む

今宵また 新たな響き 愛でながら  
ただよっていく 時のまにまに

彼は三週間ぶりに、とある発言を眼にした。音信不通だっただけに、眼にしたとたんに安堵した。文字を見たのであるが、そこから音を想像し、今できることを詠んだ。

音に聞く 苦しむ響き 受けとめて  
今この時に 祓はらひたまはむ